



122号  
2007 / 4 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」  
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)



黄土高原の子ども達 2006年春節/延川県城山山南郷村にて

撮影：周路

「わんりい」122号の主な目次

北京雑感その13「北京の春節」	2
私の調べた四字熟語11「塞翁之馬」	3
松本杏花さんの俳句集「拈花微笑」より	3
「陝北女娃」20〈芳芳〉	4
「陝北女娃」21〈煥煥と姚姚〉	5
台東聖山「都蘭山」に登る(2)	6
私の四川省 一人旅5(理塘へ向う)	8
中国を読む40「纏足物語」	10
スリランカ紹介6「お正月が毎年変わる・・・？」	11
臥薪嘗胆についての考察	12
アフリカとの出会い15「チャイの習慣」	14
「北朝鮮の夏休み」制作に当たって	15
「わんりい」掲示板	16

♪♪「中国語で歌おう!会」3月の歌♪♪

「四季歌」指導：趙鳳葵  
(作詞：田漢 作曲：賀綠汀)

於：まちだ中央公民館7F・ホール

JR横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分町田東急裏109ファッションビル7F

4月13日(金) 19:00 ~ 20:30

\*「四季歌」は映画「馬路天使」の中で歌われた人気の歌です。今回は春の季節を歌いましたが、2回目の今回は四季を通して歌ってみましょう。可愛らしい中国風のメロデーで明るくリズムがあり歌いやすい歌ですので初めての方も大丈夫です。

録音機をお持ち下さい。

●「中国で歌おう!会」於：まちだ中央公民館

毎月1回、主として第3金曜日開催 19:00 ~ 20:30

会費(月1回): 1,500円 体験無料

会場、日時など事前にご事務局長へお問合せ下さい。

TEL 042-734-5100

二年ぶりに、春節の北京に行ってきました。今年の春節は2月18日でした。

北京空港に降り立ってビックリしたのは、気温の高さでした。朝5時20分町田発のバスを利用したので、朝の寒さに備えて厚着をし、「北京での行動はこの服装で」と予定していたのですが、午後3時に北京空港の外へ出た時には、額に汗が滲んで、早々にオーバーを脱いでしまいました。

聞いてみると、2,3日前からこんな暖かさで、総体的に、今年の冬は例年よりずっと暖かいとのことでした。一昨年の春節に、廟会(お寺の縁日)に出かけた時は、寒さが足元からしんと這い上がってきて、北京の冬の恐ろしさを感じたものでした。そのときの経験から、寒さ対策を重視して衣類を持って来ましたが、すっかり調子が狂ってしまいました。移動する車の窓から見える公園の柳の枝も、こころもち緑に見えて、4月中頃のような光景でした。以前は凍っていた池の水も、部分的にししか凍らず、この時期の風物詩であったスケートをする子供達の姿は全く見られませんでした。

2月17日は除夕(旧暦の大晦日)でしたが、中国の友人が車で北京の名所を案内してくれることになりました。初めに、オリンピック開催予定地をすぐ近くから見る事が出来ました。本来は、フェンスに囲まれて部外者は立ち入り禁止なのですが、除夕で工事は休み、守衛さんもないので、開いていた工事用車両出入り口から無断で進入しました。

メインスタジアムは、小枝を寄せ集めて作った大きな鳥の巣のように、外側から複雑に組み上げた鉄骨が見える建造物で、「鳥巢(niao chao)」というニックネームがぴったりのものでした。その隣には、プラスチック素材の立方体を積み上げたような建物がありました。本当の材料は何か分かりませんが、一見すると、「ビニール製の四角い袋に水を入れて重ねてある」と説明されたら信じてしまいそうな質感です。名付けて「水立方(shui li fang)」、オリンピック用の屋内プールだそうです。両方も一部足場は付いたままですが、外側はほぼ完成していました。除夕でなければ、部外者がこんな近くまで車で入ってくることは出来なかったでしょう。一日早くお年玉を貰ったような気分でした。

その後、元大都遺跡公園・皇城公園・東便門と走って、長安街では、車一台がやっと通れるような狭い胡同に入り込んで、四合院の門の春節飾りを見ながら走ってもらいました。このあたりは四合院が完全な形でかなり

残っていて、指導者達が住んでおり、門の脇に近代的なシャッターの付いた車庫のあるのが、その目印だと教えられました。それから車に乗ったまま天安門を抜けて、故宮の中を暫く走り、東へ抜けて、お堀の端を回ってから、故宮の東側、長安街に沿ってある菖蒲河公園で車を降りて散策しました。この公園は前からあったようですが、最近整備されて、洒落た遊歩道になっています。去年の秋には豊富な水が流れていましたが、今回は季節のせい、水は少なく、中国各地からの団体観光客が幾組も、ガイドさんの旗を先頭にそぞろ歩いていました。

北京市内各所の建設現場では、作業員が故郷へ帰るので作業は中断し、警備が手薄になって、今日のように、いつもは入れないオリンピックスタジアム建設現場や、故宮の中に入れたのですが、一方で地方から、春節の休みを利用して団体に北京見物に来る人達もいるのです。どちらも春節ならではの現象と言えるでしょう。

夕方から、北京市北部、昌平区の西三旗にあるマンションへ出かけて、春節を祝うことにしました。一昨年の春節もここで過ごし、市内ではまだ原則禁止だった花火がとても綺麗に見えたので、解禁された今年はもっとすごいだろうと期待して出掛けました。6時ごろから、餃子を作り始め、料理を揃え、皆でテレビの春節晩会を見ながら食事をはじめると、外の爆竹や花火の音が次第に激しくなりました。

大きな音がするたびに、駐車場に停めてある自動車の防犯装置が反応して、ハザードランプがピカピカするのを、興味深く眺めていました。12時になると、今まで以上に爆竹が鳴り響き、室内でも話が聞き取れない程になりました。最後には、我々も用意した花火を持って外に出て、仲間に入りました。

翌日も、翌々日も、朝からあちこちで爆竹が鳴り、夜空に花火があがっていました。元宵(1月15日)までは、爆竹・花火が許可されているので、元宵には、また盛り上がるのだそうです。街のあちこちで地面に赤い花が咲いたような一画をよく目にしましたが、それは爆竹の残骸で、清掃が間に合わない所なのでした。どうも、北京の人々は、自分たちが遊んだ跡を掃除するという習慣がないようです。

爆竹や花火は、あまりにも数が多く、住宅のすぐ近くで大きな花火を揚げるので、事故が心配でした。また、終わった後のゴミも目に余りました。楽しみにしていた春節の花火でしたが、今年はマイナス面ばかりを強く感じてしまいました。



人生では、運命の吉凶はなかなか予測できないものですが、それを表す「人間万事塞翁が馬」という言葉があります。この「塞翁が馬」とはどこから来た言葉なのでしょう。今回はそれを調べてみました。

まず辞書から見ていきますと、

「現代国語辞典」(三省堂)では「人間の幸不幸というものは、前もっておしはかることができない、ということ。「人間万事塞翁が馬」[塞翁という老人の持ち馬が逃げ、それがもとで、幸と不幸が交互に続いたという中国の故事から]とありました。

また「中日辞典」(小学館)には「<sup>sài wēng shī mǎ</sup>塞翁が馬。人生の幸不幸は前もって知ることができないたとえ。よく「<sup>ān zhī fēi fú</sup>安知非福」(災いが福となるかもしれない)と連用される。」と載っています。

出典は中国の哲学書 淮南子(えなんじ)(人間訓)です。(脚注参照)

昔、中国北方の国境地帯の塞(とりで)の近くに占いの得意な老翁がいました。ある日、その翁の馬が北の地へ逃げ出してしまいました。近所の人々が気の毒に思い「残念でしたね」と、なぐさめにいくと、翁は「いや、このことがもしかしたら今度は福になるかもしれない」と言いました。

それから数ヵ月後。なんと、その翁が言ったとおりに、逃げた馬がもどってきました。そして、なんとすばらしい名馬も一緒に連れて帰ってきたのです。周りの人々が「良かったですね」と、お祝いにいくと、翁は「いや、このことが今度は禍(わざわい)になるかもしれな

い」と言いました。

その後も翁の家にはどんどん名馬が増え、翁の息子は乗馬が大好きになりました。そんなある日、息子が落馬して、股(もも)を骨折する重傷を負ってしまいました。翁が言ったとおりに禍(わざわい)が起きてしまったのです。周りの人々が、心配してお見舞いに行くと、翁は「いや、このことが今度は福となるかもしれない」と言いました。

それから1年後に、大きな戦争が起こりました。そして近くの若者の10人のうち9人までが死んでしまうような大変悲惨な争いとなりました。ところが、翁の息子は落馬のせいで足が悪かったため兵役に出ることはなく無事でした。やはり、翁が言ったとおりに福となったのでした。

〈注記〉

淮南子=出典:フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

<sup>えなんじ</sup>淮南子は前漢の淮南王劉安が学者を集めて編纂させた哲学書。日本へはかなり古い時代から入ったため、漢音の「わいなんし」ではなく、呉音で「えなんじ」と読むのが一般的である。淮南鴻烈(わいなんこうれつ)ともいう。劉安・蘇非・李尚・伍被らが著作した。十部二十一篇。『漢書』芸文志には内二十一篇、外三十三篇とあるが、内二十一篇しか伝わっていない。道家思想を中心に儒家・法家・陰陽家の思想を交えて書かれており、一般的には雑家の書に分類されている。

私が調べた四字熟語 11

塞翁之馬(さいおうがうま)

三澤 統

松本杏花さんの俳句 <sup>nián huā wēixiào</sup>《拈花微笑》より

鑑真像都の木の新芽さんざめく

<sup>qiān zài jiàn zhēn xiàng</sup>  
千載鑑真像  
<sup>jīngdū shù mù xīn yá cháng</sup>  
京都树木新芽长  
<sup>chūnyì nào rǎngrǎng</sup>  
春意闹嚷嚷

季语:新芽、春。

鑑真和尚像安供在古都的唐招提寺、寺内草木繁茂、宁静幽美。春天来临时、古木吐吐芽、青翠欲滴、苍老和柔嫩相映成趣。粒粒苞芽苞、都急切切地绽放、本是悄然无声地伸张、但作者却以喧闹来形容、使我们似乎听到了新芽的拨节声。

菜の花にその勢ひを貰いけり

<sup>cǎihuā cìyǎn huáng</sup>  
菜花刺眼黄  
<sup>jīngzhé xié dǎo réng shàng cháng</sup>  
茎折斜倒仍上长  
<sup>jīngshen wǒ jì yáng</sup>  
精神我继扬

季语:菜花、春。

金灿灿的菜花鲜艳夺目、因为这黄色本来就是最惹眼的。一阵风雨、将盛开的菜花吹倒了、但菜花不屈不挠、花茎仍然向上伸长……作者受这种坚韧不拔的精神鼓舞、暗忖一定要向菜花一样、孜孜进取。



若い頃、私は今でも忘れられない映画を見ました。それは延川県の作家・路遥の同名の小説を下敷きに改編した「人生」という映画です。本は、主人公の高加林と巧珍の恋愛物語ですが、筋はそのままに、物語を少々脚色して、見るものに深い感銘と感動を与えるものでした。特にその中で陕北の信天游<sup>注</sup>が「上河里的鴨子下河的鵝、一对对毛眼眼照哥哥」と歌うと、深い情感が心の中に沈みこんでゆくようでした。

<sup>fāng fāng</sup>芳芳を見た瞬間に私が感じたのは、何年かして芳芳が大きくなり、「人生」を映画かテレビドラマで取り直すようなら、絶対に芳芳を推薦して出演させたいということでした。芳芳は生まれながらのまつげの長い「まつげちゃん」なのです。

2001年5月、私が北山小学校を訪ねると、子供たちは学校の庭にしゃがみこんで文字を書く練習をしたり、教科書の暗唱をしていました。この辺り一帯、乃至は黄土高原全体の村の小学校でどこでも見かける様子です。窑洞の中は光が届かず暗いからでしょうか？ 窑洞の中の空気が籠もっているからでしょうか？ 或いは、紙や鉛筆が足りないのでしょうか？ おそらくこれらの原因が混ざり合っているのでしょう。私が校庭に入ってゆくと、子供たちは少し緊張したようで大部分の子供たちは頭も上げようともせず、遠くにいる子どもたちが眼の端で私達をちらりと見るくらいでした。私は何人かの女の子を選んで写真を撮りました。芳芳はその中の1人です。

その10日後、私は又北山村に行きました。学校では相変わらず笑い声がし、元気な子供たちが春先の燕のようにピーピー、チーチーとあちこちで飛び回っていました。その中に一際眼を引く女の子がいました。レースの付いた白いワンピースを着、背も高く、顔の色も白く、少女たちの中でとても目立っています。離れたところから立って遠望レンズで見ると芳芳でした。

同年8月のある朝、前回写した写真を携えて何人かの女の子を訪ねました。芳芳の家に来ると、彼女は起きたばかりでまだ顔も洗っていませんでした。(寝起きの)どこかぼんやりした姿が面白いので、彼女を竈の辺りや窑洞の前で何枚か写真を撮りました。また、窑洞の前の石板を利用してアンケートを書き込んで貰い、彼女が文字を書く姿をいろいろ写しました。私は可能な限り彼女の元気なしかしどこか物憂げな感じのある眼差しを写したいと心を砕きました。

芳芳の家を出て他の家に向い、暫く忙しく歩き回った後、村の坂道で思いがけず又芳芳に出会いました。芳芳は彼女より小さい女の子の髪を梳いて結んであげているところでした。彼女の妹だそうです。実は先程、私は芳芳のお母さんが芳芳の髪を梳かし束ねている様子を写真

芳芳和同伴们在一起。



に撮っていたのです。面白いではありませんか！ 陕北のさまざまな習俗は母親から教えられ、知らないうちに受け継がれて行っているのです。人々の風習も又こんな風を受け継がれてきたのではなかったでしょうか。

その後、芳芳は(四年生になったので) 県の小学校に通うようになり、北山村を何回か訪ねました

が会えませんでした。2003年の正月、やっと新しい衣服を着、母親と親戚のところに出かけようとしている芳芳に出会いました。しかし、慌しい折で残念ながらゆっくり話すことは出来ませんでした。

2004年7月、私は北山村を訪れますと芳芳がいました。多分、十何里かの道のりを歩いて県の小学校から家に帰り着いたばかりだったからでしょう。どうしてもいやだと言って私に写真を撮らせてくれません。お母さんがなだめたり、他の少女の写真を取り出して彼女に見せたりして気持ちを変えて貰いたいと思いましたが、どれも効果はありませんでした。少女は大きくなったので、気持ちも変わったのかもしれない。芳芳の理想は「大きくなったら医者になる」ということです。長いまつげの芳芳が白衣の天使になったら、それは本当に美しい絵になるでしょう。

(田井記)

注) 陕西省北部地方で歌われる歌



21  
姚姚  
焕焕和

刘姚姚 1989年4月16日  
家里爸爸妈妈姐姐弟弟  
土湾小学四年级二班学生  
会发学习唱歌。  
我的理想是成为一名工程师  
刘姚姚  
姚姚 1991年7月17日  
爸爸妈妈姐姐弟弟  
刘家山小学二年级  
爱好唱歌  
想做老师



収穫期の仕事はどんなに辛くても誰も文句をいみませんが、それは劉家山村の人も同じです。1998年盛夏の麦の収穫期です。村人たちは脱穀場となる広場に集まってきつい労働をしなければなりません。ある者は麦の脱穀し、ある者は脱穀後の殻を煽って払い、ある者は脱穀の済んだ麦をカマスに詰めるといった具合で、(脱穀場は人の声や機械の音で) がやがやガチャガチャと騒がしいのですが、決まった流れの中で作業は進められて行きます。赤ん坊を抱いたり、尻に幼児を従えた村の女達も集まって来ており、その子ども達の中で、太った女性の後ろにずっと張り付いていた小さな女の子が私の視線を捉えました。皆とても忙しいので、私のような暇人に関心を持つものなど誰もいませんが、この子は私の方をじっと見つめていました。私の手にしたカメラに好奇心をそそられたのかもしれませんが。

翌年、又、劉家山村を訪れると、村長は私が学校に泊まれるよう手配してくれました。ある朝、ぐっすり気持ちよく眠っていると、甲高く読書する声で眼を覚まされました。オンドルを下り外へ出て見ていっぺんに愉快的気持ちになりました。何人かの子どもたちが壁際にしゃがんで、教科書を読んでいるのです。読む速度もまちまちなら、語調には濃厚な地方訛りがあってワーワーと聞こえるだけで何を言っているやら全く分かりません。もうとても眠れそうもないので、それならばとカメラを手に子供たちを写すことにしました。カメラ



姐妹三人  
焕焕、姚姚と弟



お母さんと一緒に



早读的娃娃

を覗いているうちに私は又あの(脱穀場の)女の子を見つけました。その子も一心に教科書を読んでいました。

2001年8月の昼下がり、私は<sup>huàn huàn</sup>焕焕というこの子の家を訪ねてみました。焕焕は昼寝をしていますが、私が出来たと聞かされると直ぐに起きて、みかん色の服に着替え私の写真の被写体になってくれました。ところが、妹の姚姚はご機嫌斜めでした。おそらく寝入りばなのところを起こされて眼を覚まし、まだしっかり目覚めていなかったのでしょう。姉妹一緒の写真は一方は笑い顔、一方はふくれ面でそれはそれで面白いものになりました。お母さんはいたずらちび助も何とか写真に加えたかったようですが、まだ目が覚めていないちび助もワーワーと大声で泣き出す始末でした。

夕方、家族全員で山間のサツマイモ畑へ草を鋤きに出かけるというので私も一緒について行きました。焕焕は何歳か年長だけあって流石に仕事をする格好は様になっていますが、姚姚の方はまるで不器用です。まあ、(農作業に)慣れてないということもありますし、大人の方も彼女の労働力を当てにしている訳ではなく、子供たちに小さな時から食べることの大変さを分からせたいと思っているのです。

陝北の人がいつも言う言葉があります。「穴を一つ掘れば、一個多く饅頭が得られる」この簡単素朴な道理が黄土高原の日常生活の中でこんな風にゆっくりと子供たちの心の深いところに植えつけられてゆくのです。(田井訳)



## ■卑南族聖地

15時20分、最初のピークに着いた。事前に調べた登山案内では「普悠瑪遺址」という場所だ。照葉樹のため見通しはないが、中央の平らな場所にちょっとした広場があり、そこに先客たちがいた。彼らは輪になって歓談中の者や、座ってカップ麺を食べたりしていた。私が思うに登山道整備を終え、休憩中の登山路普請隊であろう。若者から壮年までの男女十数人だった。なかに日本語をすこし話せる三十男がいて、彼に日本から来たようなことを言って挨拶をする。どういった組織団体なのか良く訊いておけばよかったが、その時は「卑南族」のことは知らなかったの、なにも訊かなかった。

先客が休んでいる広場から東側の奥まったところ、日本の山なら祠があってもよいような感じの場所に、大きな丸石の重なりがあり、なかの一つの岩に文字を刻んだ記念碑があった。巨石に大きく「普悠瑪」という三文字が深く彫り込んである。そしてその文字が目立つよう、文字の溝を真新しい朱色のペンキでなぞってあった。卑南族の祖先をまつる石碑だと想うが、もともと台湾の「原住民族」には文字は無かったので近年の建立かと思う。

登山口へ向かう途中の公園で、廖先生が山頂と指差したしたところは、この石碑のある場所だ。ひねって想像すれば聖山「都蘭山」の山頂と、三角点のある最高点とは、別なかもしれない。そして「普悠瑪」と「卑南」とは同じ意味か？ 日本でも「明日香」と「飛鳥」などがあるし…。石碑の有る方が重要地点なのでこちらを山頂とする方が自然だ。廖先生の話しによると、この少数民族のなかには、日統時代の弾圧政策の怨念から、日本に対して反感を持っている人もいるとのことであった。直接本記事と関係ないが、日本へ帰ってから陳建年という歌手の曲で「故郷普悠瑪」というフォークソングがあるのを知った。

## ■三角点の頂上へ

日本には、一等三角点の山をありがたがって登る人がいるが、台湾にも同類がいるらしい。それは登山案内に「一等三角點」などと断り書きがあるので、それと推測できる。「日本原点」という併記のある場合もあり、日本統治時代の設置ということも分か



行き届いた「水切り」の例。←の方向に流れる雨水の勢いを弱めるため小枝を並べてあった。



「普悠瑪」の文字を彫り込んだ巨石。

る。台湾の面積は九州より小さく、一等点の数は94箇所と少ない(日本は972点)。三角点とは何かというと、地形を測量するときの基準点で、等級が一等から四等までである。そのうち「一等点」とは、測量の基本をなす重要な基準点だが、近年は人工衛星による測量に進歩して、以前ほど重要ではない。

我々が目指す三角点のある山頂へ行くには一度下らなくてはならない。岩混じりの道、相変わらず樹林の道を降下した。ほとんど遠望は利かなかったが、ときに崖の縁を歩くと、海岸線で上下に分けられた海と陸地が見えた。

登山道修復班は丁寧な仕事をしていた。一例を挙げると整備のよい登山道には、雨水で道が削られるのを防ぐための溝、「水切り」を適当な間隔で作る。都蘭山の「水切り」は山腹に誘導した流水の勢いを弱める目的で、水切りの末端に短く切った小枝の束を置いてあった。こうすれば登山道から「水切り」を経由して流れた水が山腹を削ることはない。細やかな心遣いに感心した。

気候の違いでたまげたものを見た。尾根筋は風が強いので、根ごと横転した風倒木に出会うことがある。日本の風倒木は根こそぎ倒れると哀れ、乾いて枯れてしまう。ところがここでは湿潤で温暖なためか、倒れて野ざらしの根から幹が立ち上がり、立派に成長しているのを見た。もちろん枯れてしまった樹の方が多かったが。

廖先生liàoの博物説明は随時続いた。これは家具にする樹(黒檀)であるとか、山脈の成り立ちなど。ことばで伝わらない固有名詞などはメモ帳に漢字で書いてくれた。ただし、わたしには植物の名前を書いてもらっても、もともと植物音痴なので「そうかい」と思うしかなかった。

都蘭山は登山口から山頂まで標高差600mぐらいなので、ラクチンだろうと気楽に構えていたが、登りくだりがあると、ひと汗かいてしまった。同行のA氏は最初からTシャツ1枚なので汗で黒ずんだ部分の方が多いし、Sさんも風呂上がりのような濡れた髪になっているがこれも汗でツヤが増したので





正月でも緑濃い照葉樹の中を行く。樹がかぶさり薄暗い。

ある。かくいう私もかなりの汗。麗雲さんもそれなりの汗だった。しかし、台湾の登山者にとっては厳冬期なのか、アノラックをしっかりと着込んで重装備の人が多かった。街中でも羽毛服姿をを見たので、ファッションなのかもしれない。しかし寒いという感じはなく、私は油断して台東市の食堂で蚊に喰われた。

やがて、最低鞍部を通り過ぎ、登りにかかると、すぐに行く手を岩壁に阻まれた。「大石壁」という場所だ。

登山道は、「大石壁」の左下を回り込むのだが、廖先生は逆に右側の岩溝をおりて行った。そのわけは、都蘭山頂上は樹木が茂り見晴らしが無いので、遠来の客を大展望がある「見晴台」へ案内するためだった。案内人がいなければ、知らずに通り過ぎてしまったろう。廖先生の背中を追って細い踏みあとを少し登ると、崖際に狭い露岩のテラスがあり、そこが見晴台であった。

眼下に広い氾濫原を持つ河「卑南溪」が蛇行し、西方は幾重にも連なる山なみ。玉山など3000m級の山々が「そりい踏み」の展望を期待したが、それらの山々は山腹八合目ほどの腰回りだけが見え、いただきは雲の中だった。それでも十分すばらしい眺望だった。北側は「都蘭山」もその一員である「海岸山脈」が岩っぽい山稜をくねらせて横たわる。こちらは最高峰が雲底より低い1682m(新港大山)なので、すべての地形が見渡せた。東側と南側は樹林があり、展望は無かった。

元の登山道に戻り、階段などで「大石壁」の下を通過。名前ほどのところではなく、再び尾根上の道となった。

14:20、三角点のある山頂広場に着いた。まわりは照葉樹に遮られ、展望は無かった。山頂の標識、看板などは無く、途中でよく見かけた行程距離をかけた低い看板があるだけだった。日統時代の三角点材質規格「日本小豆島産花崗岩」の立派な一等三角点はあった。台湾に花崗岩は無いのか？

山頂標識の代わりに看板があり、「3<sup>K</sup>+792 掌聲鼓勵鼓勵! 恭喜你成功 Congratulations! Here you are!」と書いてあった。3<sup>K</sup>+792とは歩程距離3792mのことで、ずいぶん細かく測ったものだ。「掌聲鼓勵鼓勵」という中国語は判らなかつたので、後で調べたら「ご苦労様拍手パチパチ」といったところらしい。記念撮影の後しばらく休み、往路を下山。廖先生の説明だと別の登山道が東西に1本ずつあるが難路だという。帰りは下りなので軽い足取りだった。



見晴台から北方を望む。急峻な山脈が続き、高度感満点。

16:20登山口帰着。出発時刻が遅かったので、軟弱登山隊としては、往復とも普段より少し早めのペースでだった。段取りをしてもらった「CT溯溪会」、同行していただいた麗雲さん、案内の廖先生に感謝。終日曇り空だったが、雨が降らずよかった。車でホテルまで送ってもらい、廖先生とはここでお別れした。

#### ■台湾式歓待

台湾では、ほかに観光地もまわったのだが、日本でもよく知られている場所なのであとは省略。

「CT溯溪会」の本拠地の台北へ行くことと荘会長から歓待された。「満月園」という渓谷にある「CT溯溪会」の新人登龍門の滝(新人が登る滝)や、観光地でない温泉、老舗料理店などを彼の車で案内してもらった。台湾式の歓待は、予備知識で知っていたが、体験は初めてで至れり尽くせり。この年の正月は、日本からほかに3隊(こちらは本格登山と沢登り)が来て、すべて荘会長にお世話になった。彼らが下山後は、私たちにしてくれたように連日の歓待で荘さんは過密接待だ。私は日本を代表してお世話になったような心もちになり感謝、恐縮であった。

「台湾百岳」をすべて登るのは、アプローチ、山の大きさ、山小屋の設備などを比較すると、日本の「百名山」を登るよりはるかに困難だ。荘会長は「台湾百岳」をすべて登り、次の課題として、沢登りに挑んだという。「沢登り」とは日本で発展した登山方法である。大衆登山の黎明期は登山道のない山が多く、先人登山者は藪を避けるため沢筋を利用した。その後沢登りを専らとする人たちが現れ、彼らは滝を積極的に登攀する。台湾での沢登り(溯溪)は荘会長らが先駆者だろう。冬を考えると日本の沢は、氷雪に埋まってしまうが、台湾では雪がないので、冬でも沢登りが可能だ。

荘会長も初期のころは日本と同じで、足ごしらえはワラジ。台湾ではワラジは棺桶をかつぐ人が履くもので、売っているところは葬儀屋だという。荘会長は毎週のように大量のワラジを買い占めるので葬儀屋が訝しがり、

「おまえのところは、大家族で毎週葬儀ができるのか？」

と言われたとか。今回同行した年長者のAさんにこのことを話すと、自分の田舎も土葬していた頃は、棺桶をかつぐ人はワラジを履いたそうだ。帰国してこの件を、いろいろな人に訊くと、都会ではそういう風習は無かったという人が多かった。(完)

5時半にしかけておいた目覚まし時計で目を覚ました。いよいよこれから旅の核心部に向かおうという朝だ。バスの出発は6時半。いつもは寝起きの悪い私も、心地良い緊張に包まれて飛び起きた。

急いで顔を洗おうと共同の洗面所に向かうと、中から真っ赤なブリーフ一枚の男が出てきてギョッとする。隣の部屋に泊まっていた漢民族夫婦のおじさんだ。ここは中国なので、とりあえず裸なのは許すとしても、何なんだ～！そのパンツの色は！

度肝を抜かれながら歯を磨いているうちピンときた。真夏の成都でひと時の涼を求め、スーパーマーケットをひやかして歩いていると、下着売り場の一角に真っ赤な下着コーナーがあったのだ。真っ赤なパンツには「吉祥如意」やら「財源廣進」などの文字が金糸で刺繍されており、「さすが中国！」と大いにうけた私は、日本に帰る折には何枚か買い求めて友人に配りたいものだと思っていたのだが、期せずしてその招福パンツを日常的に着用している中国人に出会う事ができてしまった訳だ。こんな機会はあるものでもないだろう。やはり私の旅はついている。

ཨ་ཁྱེད་ཀྱི་མཉམ་འབྲེལ་ལྟུང་།

すばやく身支度を済ませ、バスの乗客向けに早くから開店している食堂で水餃子を食べるとバスターミナルに向かった。やはりチベット玄関口の街、康定である。早朝にも関わらず各方面に向かうバスと乗客でターミナルの中はざわめいていた。

今日の目的地は世界で一番高い街。標高4000メートルに広がる大高原の中に、忽然と現れるチベット民族の街、理塘だ。前回訪れた時にはこの街で高山病にかかり激しい頭痛に悩まされたが、今回は四姑娘山で5000メートルを体験済みだ。既に高度順応しているので高山病の心配もない。そう思うと自分の身体が少しチベット人に近づいてるような気がして嬉しかった。

ཨ་ཁྱེད་ཀྱི་མཉམ་འབྲེལ་ལྟུང་།

「それは唐突な出会いだった・・・バスに乗り込むと、そこにチベットがあったのだ」

主に東南アジアを中心とした旅の体験記を数多く執筆されている下川祐二氏の著書、「歩くアジア」の中の一説である。下川さんは以前私が営んでいたタイ料理屋で、店のお客様として懇意にさせていただき、当事出版された本を何冊か頂いていた。この著書の中では「日本から飛行機を使わずにアジアを横断して、イスタンブールまで辿り着けるか」という旅に挑戦しておられ、バスで厳冬のチベット越えをするくだりでは、やはり早朝の康定でバスに乗り込みチベット圏に向かって旅立っていくのだ。



その時から10年ちかくもの月日が流れていたが、その朝、私が理塘行きのバスに乗り込むと、やはりそこにはチベットがあった。

理塘に向かうバスは、それまでとは全然違っていった。前日成都から康定まで乗ってきたのは設備も乗客もごく普通の大型長距離バスであったのが、ライトバンを少し大きくしたような古ぼけたミニバスに変わっていた。バスの後部に荷物を積み込むようにしてあったが、他の乗客の荷物で既に満杯。ほんの隙間に自分のザックを無理やり押し込み、バスに乗り込むと私は一瞬目を見張った。先に乗り込んでいた乗客は全員チベット人だったのだ。康定の一般的な住人たちより貧しげな衣服の者が多かった。頭にサンゴやトルコ石の髪飾りをつけ、民族衣装に身を包んだ遊牧民の姿もあった。

バスの中はほんのりと土の香りがしていた。それはこれまで私が乗ってきた下界のバスとは明らかに違う世界であり、漢民族とチベット族が半々で構成されている康定の街よりも更にチベット色の凝縮された空間だったのだ。私の勝手な想像では、このバスの乗客達が成都まで出て行く機会はそれほど無いように思えた。康定より奥のチベット圏に暮らす多くのチベット族の人達にとっては、康定が最大の都会なのではないだろうか。それぞれ何かの用事で康定にやってきて、これから自分の街に帰るところなのではと思われた。

座席番号などは勿論無く、乗り込んだ順に思い思いの場所に座るようになっていたので、私はチベット服に身を包んだ女性の隣に腰掛けた。

私が席に着いた少し後、西洋人の若い女性が一人、大きなザックをかつい乗り込んできた。彼女も車内の雰囲気は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたが、私の席か



ら通路を挟んだ一人掛けの座席に腰掛けると真ん中の通路にザックを置いた。彼女の大きなザックは後部座席に向かう人たちにとってはかなり邪魔な感じだったが、私が乗った時には既に満杯だった荷物置き場に、彼女のザックを置く場所は残されていなかったのだろう。座席のスペースは狭く、大柄な彼女が座ると通路以外に荷物を置ける場所は無かった。

座席が全部埋まりこれで出発かと思われたが、それでも乗客は次々と乗りこんでくる。満席になった後は通路に補助椅子を出し、そこにも人が座るのだ。補助椅子まで全部埋まったところで定員となるようにチケットが売り出されているようだった。

私と西洋人女性の間にも、少し汚れた身なりのチベット族の青年が座ろうとしていた。しかし彼女の大きなザックが邪魔をしてなかなか補助椅子を倒す事ができない。やっと倒しても座席の前のスペースをザックがいっぱいに埋めているので足を下ろす事ができず、下ろせばザックを踏むような感じになってしまう。西洋人の女性は申し訳なさそうに「かまわないから足を置いてください」というジェスチャーをするのだが、チベット族の青年は慌てて足を引っ込め、身体を曲げて多少不自然な体勢をとると、なんとか自分の足がザックに当たらないように腰掛けて彼女に笑顔を見せた。

それはやむを得ない事だったとはいえ、他の席の場所にザックを置いている西洋人の彼女に少し非があるような出来事に感じられたが、彼は迷惑そうな顔ひとつしなかった。そんな青年の穏やかさが、見ていた私にも嬉しく感じられ、ついこれが日本だったらどうだろう・・・と思いを廻らせてしまう。着ている服は土で汚れていても、この青年には他人を思いやる心のゆとりが感じられた。この土地でチベット族の人達に接していると、そう思う事にたくさん出会う。

ཨ་ཁྱེད་ཀྱི་མི་ཚེ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་

私と西洋人の彼女以外はチベット人ばかりで満席になったミニバスが出発した。

バスの最前列には精悍な顔立ちに髪を長く伸ばしひげを蓄えた、一目で遊牧民系とわかる男性が、少しくたびれたスーツを着込んで乗っていた。乗客ではあるが、人数確認をしたり、車酔いで気分が悪くなってしまった女性のために運転手に命じて車を止めさせたり、まるで車掌のようにバスを仕切っているような感じだ。都会に行くからとお洒落をしていたのだろうか。彼には申し訳ないがスーツは全然似合っていない。私の目から見たらそれはちょっと滑稽にみえた。チベット族の衣装を着ているほうが何十倍もかっこ良いのに・・・。

彼らにとって民族衣装は誇りのあかし。身に着けた飾りの多さで自分の力を誇示しているのだと本で読ん



だが、それもだんだん過去の事となっているのだろうか。私がこの土地にひかれた大きな理由の一つが、彼らチベット遊牧民の格好良さだったのだ。どこまでもつづく草原で馬を駆る彼らの姿は、アメリカ開拓時代のカウボーイを想像させるが、どこかそれよりも勇壮でロマンチックで、私は出会うたびにウットリして見つめてしまう。天上の世界で自由に暮らす彼らにスーツなんて似合わない。都会の人間の真似事などせずに彼らの世界で誇り高く生きて行って欲しいなどと思うのは旅行者の勝手な感傷だろうが、やはりそう願わずにはいられない。苦笑と共にちょっぴり胸の痛みの混じった複雑な気持ちで、私は彼の後ろ姿を見ていた。

ཨ་ཁྱེད་ཀྱི་མི་ཚེ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་

バスは街を抜けると直ぐにどんどん高度を上げて走っていく。高度が上がるにつれて車内の気温も急速に下がってきた。康定の先には標高4298メートルの折多峠が在るのだ。この道を何度も経験している私はあらかじめ用意していた服を取り出し次々と重ね着して行くが、西洋人の女性は寒そうで、目が合うと、「あなた準備良いわね」というような目をして微笑んだ。

峠の最高地点には仏塔が建てられ、お経の書かれた色とりどりのチベット式の旗、タルチョがはためいている。観光バスなら間違いなく車を止めて記念写真を撮るポイントだが、現地人ばかりの公共バスはあっという間を通りすぎてしまう。フとみれば、私の隣にすわっているチベット青年は頭を西洋人の女の人のうとに持たせかけて眠ってしまっていた。彼女はそれを疎ましがる事もせず、そのままにしてあげている。優しい人のようなようだった。

ཨ་ཁྱེད་ཀྱི་མི་ཚེ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་ལོ་རྒྱུ་

ウトウトしているとバスが止まった。新都橋しんときょうという街だ。乗客たちがバラバラとバスを降りて行く。寝起きでぼんやりしている私に、「あなた英語が解かる？」と西洋人の女性が話しかけてきた。

「少しだけ」と答えると、ホッとしたような表情をうかべ、「一体何が起こったの？」と訊いてきた。やはり長距離バスというよりは地元民ばかりの乗り合いバスの様な雰囲気の車の中で、一人だけ言葉も通じず不安だったの

だろう。「ただのトイレ休憩だから大丈夫。私たちも行きましょう」と一緒にバスを降りた。

市場の裏手にある公衆トイレは思わず笑ってしまうほどの汚さの上に、中国ではおなじみの、腰の辺りまで仕切りがあるだけの壁もドアも無いトイレだったが、彼女も慣れているのか臆することなく、私たちは並んで用を足した。バスに戻ると改めて自己紹介しあう。彼女はスウェーデンからやってきたツーリストなのだそうだ。どうりで彼女の肌は透き通るように白い。

女性一人でここまで来ているツーリスト同士の親しみを感じた。英語で書かれたガイドブックの地図を広げ、「あなたは何処に行くの?」と聞かれたが、私の目的地である垂丁は、そのガイドブックには地名も載っていない。おおよその位置を指で示しながら、「とても



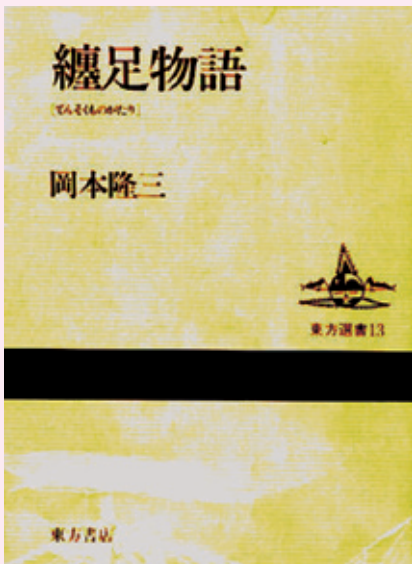
キレイな場所なのよ」と言うと「私は知らない場所だわ」と悔しがりながら笑顔を浮かべた。朝からのチベット青年とのやりとりの様子から、彼女もこの土地や人に対して愛情を持っているように感じられ、もっと話してみたいような気もしていたが私たちの間に座っているチベット青年が戻ってきたため会話は中断され、バスは再び走り始めた。

西洋人の彼女がブドウを取り出し隣のチベット青年や私に勧めてくれた。私もお菓子を取り出して二人に配った。最前列の補助席に座っていたスーツ姿の遊牧民の男は、奥さんだと思われるチベット服姿の女性に膝枕して居眠りしている。

理塘に向かう満員バスの中の空気は和やかだった。

(続く)

## 中国を読む-40



### てんそくものがたり 「纏足物語」

岡本隆三 著 東方書店

まだ初々しかった社会人一年目に、中国の春画を見せてもらったことがある。当時、私は中国関係の書籍を積極的に出版する会社で、大学の研究室へ本を売る仕事をしていて、営業先の教授に面白半分に「見る?」と

は、出版社の社長が「こんな破廉恥な本を出したら、潰れる間際の会社だと思われる」と最後に小心なところを見せ、終わってしまったが、勉強のために買ったこの一冊は私の本棚で生き残り、6年の歳月を経過して、ようやく私は読んだ。

前置きが長かったが、「纏足」の歴史である。広い世界のなかで、唯一中国にのみ存在した奇怪な風習は、女性が男性に圧迫されていた時代の一端を示すものだった。纏足が発生したのは宋の時代で、纏足禁止令後も続き、確実に下火になったのは1931年というから実に1000年もの間、中国の女性は纏足によって自由に動くことを制限され、男性の愛玩具のような状況に置かれたといってもいい。夫が生きている間はいいが、早くして死なれてしまうと、歩くのにも困難な体で子育てをし、しかも貞節が厳しく問われる時代、再婚もできずに並々ならぬ苦勞をすることになる。

言われて、好奇心丸出しで、中国の春画オタク教授のコレクションを拝見させていただいた。

のちにそれらを出版したいという依頼もあり、美術関係の教授に鑑定をしてもらったところ、膨大なコレクションのなかから、唯一「すばらしい!」と絶賛された一枚が今でも記憶に新しい。色落ちのまったくない巻絵の春画。広げていくと、男女の絡みが次々に現れる。度肝を抜かれたのが、すべての女性が纏足だったこと。一糸まとわぬなかに、女性の足の先だけが覆われており、さらにその纏足で大きな玉を支えながら情事に及んでいる絵もあり、私はなにより、その性に対する頑張りに尊敬の念を覚えてしまった。「春画は、おおっぴらに見られるものではないから、古いものでも色褪せることなく、きれいに保存されるんだよ」と、さすが先生、きちんと講義も付いてくる。春画の企画

宋代前は、女性は強く、たくましく、おおらかに生きていた。異民族などとの争いが激しい時代に突入し、男性が家を空けることが多くなると、女性の足を縛って家に閉じ込めることに。さらに、纏足フェチの大量発生も手伝い、1000年の纏足史は横たわる。

著者の岡本氏は、纏足文化はハイヒールに受け継がれて生きていと締めくくる。そういえば、会社のきれいな(怖い)先輩が言っていました。「お洒落とは無理をすること」。足がぼろぼろになってもハイヒールを履き、耳が膿んでもピアスをし、爪が黄色くなってもマニキュアをする。女性は作られていくものなのだと、すっぴん&スニーカー愛用の「イケテナイ女」の私、厚かましくも感している。

(真中智子)



## お正月が毎年変わる・・・？

スリランカのお正月は日本と違って毎年同じ日ではありません。4月13日か14日なのですが、どちらの日になるかは高名な僧侶や占星術師が星の動きを見て決めます。

新年がどちらの日になるか決まると、テレビ、ラジオ、新聞などで発表されます。この場合にも日本と違って、単に曜日が決まるのではなく、何日の何時何分から新年が始まると発表されます。日常生活や経済活動は西暦で動いていますが、伝統的なお祝い行事としてのお正月はこの時間からスタートします。同じ様に、結婚式等の冠婚葬祭や公式行事の開始時間も占星術によって決まるので、時としてとんでもない早朝や深夜に始まったりして驚かされます。

スリランカのカレンダーでは西暦の1月1日だけが祝日になります。但し、日系企業の多くは日本の本社に合わせて年末年始の長期休暇を取りますし、欧米企業もクリスマス休暇を併せて取るので大概の駐在員は年に2回新年を祝う事になります。

シンハラ新年は10日近く休みになり、会社や商店は店を閉めっぱなしになります。コロンボに住んでいる人達の多くもそれぞれの故郷を目指して民族大移動を始めます。お金持ちや外国人の家に住み込みで働いている人達にとってはお正月だけが唯一の長期休暇で、それぞれ雇い主からボーナスとお小遣いやお土産を貰って故郷に帰ります。

お正月の準備は4月になると直ぐに始まります。故郷の親戚や友人、コロンボに住む同郷の友人と連絡を取り合って帰省スケジュールを調整したりするのに忙しくて、4月に入ると仕事どころではなくなる人が多くなります。

キャンディ出身でコロンボに住んでいる友人のニシャンタを例にしてみましょう。先ず、4月に入るとお正月の晴れ着を購入します。コロンボ市内にある、House of Fashion等の量販店はこの時とばかりにバーゲンセールを開始し店内はお客であふれ、店の外でも入店を待つ人でごった返します。

待つ人達のおしゃべり、ガードマンの笛の音、路上にまで出ている人を蹴散らすクラクションの音などで、更にお正月気分が盛り上がってきます。親戚や友人達へのお土産を選ぶ事も悩みの種になります。ペッターやフォートの商店に何度もかけては品定めをします。日本でも奉公人にとって盆とお正月しか休みがなかった

頃はこんな具合だったのかと想像されます。

お正月休みが始まると、長距離バスのターミナルや鉄道の駅は帰省客でごったがえします。宅急便なんて無いので荷物を先に送ることは出来ません。各自が可能な限りの荷物をもって車内に乗り込みます。僕はこの時期のバスや列車に乗った事がないので定かではありませんが、ニシャンタから聞いた話では車内では一緒に帰省する家族、親戚、友人等が一斉に近況報告を始め、その話し声で鳥籠に首を突っ込んだような騒音だそうです。

無事に故郷に戻り旧交を温めているうちにお正月が近づきます。各地にお正月用品の臨時マーケットが開かれ、お正月の前日には食品等の買出しに出かけます。キャンディの場合は鉄道駅のそばにある刑務所の周りが正月用品のための屋外マーケットになります。

ここで、お正月用の食材や雑貨など何でも揃える事ができます。スリランカでは買出しに男性が出かける事が多いです。男性に言わせると自分達がお財布を握っているからと言います。

実際のところスリランカ女性はかなり強く、家庭内の実権を握っています。男性は買出しメモを持たされて買出しに行かされ、山の様な荷物を持って少しでも安い商品を探してマーケットの中を歩き回っています。但し、男性にとってもマーケットを歩き回るのはめったに会えない知り合いに会えたり、家の掃除をさぼれたりして、楽しくてしかたがない様に見えます。

お正月当日には、全ての儀式の時間が決められていてテレビで秒読み付きのアナウンスがされます。新年で最も大事な儀式は「かまどの火入れ」です。女性達はテレビの秒読みに釘付けで時間を待ち、かまどに点火して鍋で牛乳を沸かします。牛乳をわざわざ沸騰させて、こぼれ具合でその年の吉兆を占います。どのようにこぼれてもそれなりに吉となります。

その他に沐浴時間、仕事始め時間、新年最初の外出時間などが決められています。お正月に食べる特別な料理として最も大事なものは、縁起の良い食べのものと云われるキリバトゥで、ココナツミルクと塩を加えて炊き上げたご飯です。家族や親戚、友人を含めて大勢で賑やかに食べるのが一番の楽しみです。

お正月の数日間は親戚を訪ねたり、友人に会ったりするうちに瞬く間に終わり、再び故郷から戻る民族大移動です。きっと、帰りの車中で次の年のお正月に思いを巡らせている事でしょう。

「呉音の伝来」(わんりい 1月号(120号)掲載)についての私の記事の中で「臥薪嘗胆」の故事に関して日中での解釈の違いがあります。これについてご意見を頂きましたので、更に検証を深めてみました。

日本では呉の国の夫差(ふさ)が臥薪をし、越の勾踐(こうせん)が嘗胆をしたことになっていますが、中国では越の勾踐一人が臥薪嘗胆したことが通説になっています。とはいっても、中国でもその真偽のほどは究明しがたい一つの謎となっています。

臥薪嘗胆について中国で検証されている内容を中心に、私が調べた範囲で以下述べたいと思います。

## ●山東大学孟祥才教授の話

### 1. 「臥薪嘗胆」は後世の人による創作かもしれない

最も信頼に足る春秋時代の「左伝」(左丘明)、「国語」(著者不明だが左丘明説が有力)には臥薪嘗胆については一言も触れられていません。また、前漢の司馬遷(しばせん)の「史記」には勾踐「嘗胆」<sup>注1)</sup>とあるが、臥薪は記載されていません。

唐宋の時代になって初めて「越王出則嘗胆、臥則枕戈」<sup>注2)</sup>という言葉が出てきます。

臥薪嘗胆の言葉を初めて使ったのは北宋の詩人蘇軾<sup>注3)</sup>です。ただし勾踐とは関係なく「三国」の記述の中で使っていますが<sup>注4)</sup>、蘇軾は偉大な文豪ですからその言葉の影響は大きかったといえるでしょう。

また一方、春秋や漢時代の歴史家が勾踐の臥薪を記載し忘れた可能性もあります。すなわち勾踐は呉に敗れてのち三年間呉の国で馬夫(馬小屋の番人)をやらされた。そのとき芝草の上で寝た可能性も非常に高いと言えます。

### 2. 呉越の戦いの舞台裏

当時、呉の国の西に位置する楚の国が強大でしたが次第に没落してゆき、その過程で楚の人材が近隣の呉と越に流れたのは当然の成り行きと考えられます。伍子胥(ごしよ)や伯嚭(はくひ)また齊から孫子(孫武)などが呉にやって来、また越には范蠡(はんれい)や文種など有能な人材が集まってきました。

呉越の戦いは、楚の国へ侵略させない為に両国を拮抗させ強大な国を作らせないと言う目的が楚からの人材の考えの中にあっただけではないでしょうか(ただし、伍子胥は楚に恨みがありこの復讐の為に呉にやってきたことになっています…筆者注)。その意味では呉越の戦いの



「臥薪嘗胆」の図(「金羊網」より引用)

真の演出は楚の国の連中が行ったとも言えます。

また呉が中原を目指し領土を拡大するには、南に位置する越にまず打撃を加え後顧の憂いをなくしておく必要がありました。これは越にとっても同じことであり、当時としては呉越の戦いは個人的な因縁の問題を越えて歴史的、必然的な成り行きであったといえます。

## ●その他の説

南宋の「左氏伝説」(呂祖謙)、明代の「春秋列国論」(張溥)、又その後の「左伝事緯」(馬驥)、「釋史」(馬驥)などでは夫差が臥薪嘗胆したと記されています。一方南宋の「戊辰四月上殿奏札」(真徳秀)、「古今紀要」(黄震)、「黄氏日抄」(撰者:黄震)には逆に勾踐が臥薪嘗胆したと記されています。

清代の「綱鑑易知録」(呉乘権)では勾踐が呉の国での三年の苦役ののち国に帰って臥薪嘗胆したとあり、またすぐその後出された「東周列国志」(余邵魚)では越王勾踐「累薪而臥、不用床褥：又懸胆于坐臥之所、飲食起居必取而嘗之」(薪を重ねその上で寝た、ベッドや敷きふとんは用いなかった、また坐るところや寝るところに胆を吊し、飲食や寝起きの際には必ずこれを嘗めた…筆者訳)とあってこれが中国では一般に広く伝わったものと思われる。現在、中国の歴史書や辞書などではほとんどすべて「勾踐臥薪嘗胆」となっています。\*括弧内の名前は著作者名です。

一方日本では、十八史略(宋末期から元初期にかけて曾先之(そうせんし)が著した史書。史記から宋鑑までの十八の歴史書をわかりやすく、面白く紹介するという目的のために書かれたもので中国では資料性は低いとみられています。しかし他の情報量の少ない外国人にはとても重宝されたよ



うです。)で夫差臥薪、勾踐嘗胆となっておりこれが広く読まれ人口に膾炙<sup>かいしや</sup>されたものと思われます。日本では江戸中期以降、中国史を知るための本として広く読まれました。

臥薪嘗胆について日本においては作家の小説や教科書などすべて十八史略の記述に基づいており疑いを差し挟む余地はなかったのです。

## ●まとめ

中国においても臥薪嘗胆は歴史的に有名な故事ですが、これという説は確立されてなく、いまだに一つの謎となっています。

呉越の戦いの歴史的背景(越は呉に敗れて国力は落ち、呉にとらわれの身となった越王・勾踐は夫差に許されて帰国してのち、越の国の人々とまさに艱難辛苦を共にし、国力の回復を志した、すなわち自ら先頭に立って田畑を耕し夫人は機を織ったといわれる)、また両国の国力の差などを勘案するとき、越王勾踐が臥薪嘗胆したという中国での通説は納得が行くように思われます。また、どん底の中、血のにじむような苦勞を重ねた末に成功を勝ち得たという教訓的意味においても勾踐臥薪嘗胆のほうが理解しやすいように思われます。

史記にあるごとく勾踐が嘗胆のみを行ったのが史実に一番近いのかもしれませんが、しかし、臥薪と嘗胆が既に切り離せない一つの述語として確立していますから、私は中国での解釈のように越王・勾踐が臥薪嘗胆したと見るほうが妥当ではないかと考えています。

## ■注

- 1) 坐臥即仰胆、飲食亦嘗胆：坐ったり寝たりするとき胆を仰いだ。また飲食の際にも胆を嘗めた(図参照)…筆者訳
- 2) 越王は部屋を出るとき必ず胆を嘗めた、また寝るときは矛を枕にして寝た(戈は矛[ほこ]の意)…筆者訳
- 3) 蘇軾(そしやく)(1037～1101):北宋時代の政治家、詩人、書家。四川省の出身。号は東坡(とうば)北宋最高の詩人とされ、その詩は「蘇東坡全集」にまとめられています。気骨があり豪放な性格で、もっぱら伝統を重んじる官僚集団のリーダー司馬光と、また司馬光の政敵で革新を唱える集団リーダー王安石とも異なる政見を持っていました。その為その二人のいずれが政権を握っても迫害されて地方官を歴任しました。杭州で任に就いているとき西湖の堤の造営で苦勞している人々を豚肉の醤油煮込みを自ら作ってもてなし、これが杭州名物・東坡肉(ドンポーロウ)の由来だと伝えられています。
- 4) 三国時代、呉の孫権が魏の曹操宛の手紙として書いた蘇軾の文章の中に「私(孫権)が臥薪嘗胆した」とあります。これは史実ではなく蘇軾が遊び心で書いた文章なので、ましてや呉越の戦いとは全く関係のないものです。

## 【参考文献】

- 「山大視点」, 山東大学新聞中心(孟祥才教授の話)
- 「華夏経緯」, 華夏経緯資訊科技有限公司 臥薪嘗胆の項目
- 「Wikipedia」, 臥薪嘗胆, 十八史略の項目および蘇軾の項目
- 「中国通史」, 紀江紅 北京出版社
- 「金羊網」, 羊城晚報集團 臥薪嘗胆の項目

なお本記事作成に当たっては何媛媛さん(‘わんりい’媛媛来信のコラム筆者)と莊魯迅氏(中国歴史研究家、作詩家、音楽家)のご協力を頂きました。

## ‘わんりい’のおたより会員継続の お願いとお誘い

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011‘わんりい’  
毎年、4月は‘わんりい’おたより会費更新月です。継続会費(1500円/年)の納入(上記)をお願いします。新規入会も歓迎します。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

## 【‘わんりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わんりい’は、会員の皆さんから寄せられた原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。皆さんの投稿をお待ちしています。

\*紙面が16Pと限られていますので、掲載まで暫くお待ち頂くことがあります。また、紙面の都合で作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

「Chai(チャイ)」はスワヒリ語で、「お茶」を意味するが、隠れた意味として「わいろ」として使われることがある。「わいろ」や「汚職」の問題が援助する際の途上国の問題として、先進国が注目し始めてから久しい。

つまり、公職にあるものが、それを利用して個人の利益をを図ろうとする問題である。先進国の援助資金の中から政治家、政府の要人、権力者に流れてしまうお金を指す。2006年ドイツのNGO「トランスペアレンシー・インターナショナル」が行った調査によるとケニアでは年間12億ドルもの援助金が汚職によって喪失されていると報告している。

「わいろ」や「汚職」の問題は世界中どこにでも見られることで、もちろんケニアだけに限ったことではない。しかし、先ほどのドイツのNGOが世界の「200年度政治の透明度」をランク付けしたところ日本は17位、ケニアは142位という低さからケニアがいかに透明性にかけているかが分かる。この結果は、アフリカ諸国の中でも抜群の政治の不透明性であることが分かる。ちなみにアフリカの諸国の中では、ボツワナの37位で最高であった。

なぜアフリカ諸国はこんなにも「わいろ」や「汚職」にまみれているのだろうか？ その原因は、「失業率の高さ」の次に「給料の低さ」が挙げられると思う。特に公務員の給料は低いと言われている。部署やポストにもよるだろうが、大体が日本円にして1万円前後、公立高校の教師でも2万前後である。また企業勤めの人でも1万円以上もらっている人はほとんど居ないだろう。

その反面、政治家や政府の要人は桁違いの給料を得ているのである。それが給料だけでないことは、その暮らしぶりからでも良く分かる。それらの人々は、その地位、職権、ずば抜けた知性を私財に転用することに躍起になっているのをよく見聞きする。実際、メディアでも話題になった現職大臣による「アングロリーシング事件」「ゴールデンバーグ事件」等の汚職がらみのスキャンダルは氷山の一角であるのだろう。

アフリカにはよく「中間層」がないと言われる。「富裕層」が「貧困層」であると言われる。それはやはりまるで「富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しく」という見えないルールが敷かれているような気がしてならない。そこにはやはり、「わいろ」や「汚職」による富の集中が確実に存在しているように思う。

アフリカに行く前は、そのような問題は一部の政治家の問題であって一般の人々には関係のない話であるだろ

うと思っていた。そしてまさか自分が「わいろ(小額の)」を日常的にするようになるとは想像していなかった。私のわいろの目的はささいな事柄のことであるが、金額と内容の問題ではなく、わいろはよくないことだ。しかし、ケニア暮らしも月日を重ねていくと、それはもう「悪いこと」ではなく、「必要悪」というか「生活するうえでの潤滑油」になってきて、あまりにも広く人々の社会のあらゆる場面で行われているのを見るうちに「罪悪感」は薄らいでしまっていた。

例えば、私はあるクリスマスも押し迫った日にある田舎町へ友人を訪ねることになっていた。スーツケースを抱え、公共の乗り物である「マタツ」乗り場に着いてみると、50名以上の人々が一台に数十人しか乗れない車を求めて並んでいるのが目に入ってきた。しばらく列の最後尾について並んでいたが、車の数以上に人の数はどんどん増えていく。

「このままでは、今日中に乗れないかもしれない」と直感的に思った。そんな私を察したのか、制服をきた一人のマタツ乗り場の職員が近寄って来た。「50シリング(日本円にして100円ほど)で、あなたと荷物の場所を次の車で用意出来る」と小さな声で言ってきた。これは、彼の職権を利用した「わいろ」の誘いである。頼んだのは私ではないが、同意すれば同罪だ。「迎えの人は時間には待ち合わせ場所に来ているのに」。日も落ちてくると外国人である私が、ここでスーツケース片手に乗り物を待つのも危険な事であると思った。私は、運賃プラス50シリングを渡した。彼は視線を合わせずそれを受け取った。私は、生まれて初めて「わいろ」を渡したことになってしまった。彼は、黙って私のスーツケースを運び車に乗せ、私は列の一番前に並び、すぐに来た次の車に乗るように促された。

そして私は時間通りに到着し、無事移動することが出来た。たった100円を払えただけで、数時間の待ち時間を省略し、荷物さえ運んでもらい、彼には「ありがとう」と言われ感謝された。

また別の例を挙げると、私はあるデータを集めるために政府の統計局へ行った。受付で「外国人は紹介状がないと入れません」と頑なに拒否された。自分の勉強用の資料集めであったので、紹介状はなかった。私は、「誰でも入ると聞いて来ました。資料は自分の勉強用です。」と言った。そして私は聞いてみた。「いくらあればいいの?」「100シリングです(200円ほど)」。ケニアの暮らしが長くなると、その人が紹介状のあるなしを言っているのでは



なくて、お金を要求していることかどうかの区別は付くようになってきた。お金を渡し、受付名簿に名前を書くように言われる、そしてデータを集めることができた。

駐車場の場所を確保する、図書館に入る、銀行の行列を飛ばす等、日常の些細なことの中に、「わいろ」は存在している。もちろん公金ではなく、自分のポケットマネーではあるが、職権を利用した行為に加担していることは悪いことだ。しかし、数十円から数百円で得られる利便性は私の良心をどんどん無くしていったように思う。

私は手放して、「わいろ」を要求する人たちを批判出来

ない。不当に雇用されたり、低賃金で働かされたり、公務員は給料不払いが多い。彼らは、自分たちが贅沢したいために「わいろ」を要求していないことも良く分かる。家族思いな彼らだからこそ、少ない給料を補うように職権を利用して、ありとあらゆる方法で、日々小銭を集めようとしているのであり同情してしまう部分がある。しかし国が発展していくためには、やはりこういうやり方が日常である社会は健全ではないと思う。

もちろん「チャイ(紅茶)を飲む習慣」の方はずっと続いて欲しいと思うが。

## ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」制作に当たって

ren shu jian  
任書劍

2004年の夏休み、私は日本から中国に帰り、それから延辺地区を経由して北朝鮮に入った。私と同年代の中国人にとって、北朝鮮に対する感情は少し複雑とも言える。子供の頃に受けた教育の中で、北朝鮮はずっと中国の友好的な隣邦として登場し、また私達にとって北朝鮮の人の印象は善良で、まじめで、歌も踊りも上手である。その上、朝鮮半島の戦争に関しては、中国の教科書もずっと米国が朝鮮半島を占領しようとしたから起きたと言われている。このような話は前世紀の90年代まで続いてきた。

1998年、私は日本に来て、日本の社会の反応は北朝鮮はずる賢い強引な国家だと言われていることを初めて知って驚いた。ニュースのほとんどが経済危機と、ミサイル発射事件、核開発と拉致事件に関連している。私はこのような中国と日本の反応の違いを当初とても受け入れることができなかった。さらにブッシュ大統領の、「北朝鮮は悪の枢軸」という発言で人々はいっそう北朝鮮に対して悪印象を深めた。私の周りの殆どの日本人友人は北朝鮮に対して悪感情を抱いている。私が北朝鮮に向かう行動はとても危険であり、できるだけ控えたほうが良いと言う人さえもいた。

中国東北地方の延吉は北朝鮮との深い関係から、北朝鮮の旅行業務を取り扱っている業者がある。私はそこから北朝鮮に入った。元々はピョンヤンに向かう計画だったが、ちょうど北朝鮮の建国記念日に当たったため、外国人観光客の入国が制限されていた。その結果、私は北朝鮮の会寧、羅先、清津という自然環境はきれいだが発展は遅れている街へと向かった。もしピョンヤンを芝居に満ちた街だとすると、この三つの街のほうが比較的庶民的な北朝鮮を表しているのではないかと思われる。私は以前に数人の北朝鮮の一般人取材する機会があったが、彼らは素朴で真面目で、世界のたくさんの民族と同じ様にいろいろな夢と、優雅な生活に対する憧れを抱いている。しかし彼らが受けた教育は、彼らにきわめて神格化した国家の統治者を崇拜させることである。ここで私は中国の文

化大革命を思い出す。

中国人には北朝鮮を批判する資格はない。何故ならば30年前の中国は同じことをやったからだ。中国の歴史は私達に教えてくれている、人間性が圧迫され、不自由な社会はいつか失敗に終わる。けれども失敗の原因は外部からの圧力ではない、最も重要な力は内側からの力である。

このドキュメンタリーを通して、私は日本や海外の人々にもっと違う角度から北朝鮮を見てもらい、客観的にこの国家の真実の顔を知ってもらえることを望んでいる。同時にもっと多くの人々に彼らを尊重し理解して欲しいと望んでいる。経済制裁と武力に苦しむのは北朝鮮当局者ではなく普通の朝鮮人であることを知ってほしい。彼らが求めているのは手助けであって敵対ではない。アジアの歴史が生み出した多大な憎しみが、われわれの世代にまでこんなに重すぎる重荷を背負わせている。私達の世代から共に新しい紀元を開拓することを望んでいる。

### 『北朝鮮の夏休み』要約：

'04年の夏、日本国内は拉致事件のため、多くの日本人が北朝鮮に対して経済制裁を行うことはやむを得ないと考えている。このような中、私は一人の中国人観光客として、中国延辺地区から出発して北朝鮮の会寧、羅先と清津などの3つの都市を回った。一泊二日の北朝鮮の旅ではあるが、私は各種の厳しい制限を受けながら、できるだけ北朝鮮の現状を撮影し、またできるだけ多くの北朝鮮の人々に接触した。今回の取材を通して、北朝鮮の人々の真実の姿と彼らの夢に触れることができた。現状では政治的・経済的・文化的隔たりによる取材の限界はあるものの、作品を通してもっと多くの人にこの国のことを理解して欲しいと願っている。

\*この文章は、昨年4月、「北朝鮮の夏休み」上映の折に任書劍さんから頂き、2006年度の4月号「わんりい」に掲載したものです。

yuányuán シャールピン  
何媛媛さんと手づくり餡餅で交流しよう！

‘わんりい’紙上で、3年にわたって中国のさまざまな風習や考え方、ご出身地である山西省の風物や歴史に関わる話など紹介くださった何媛媛さんとの交流の機会です。中国のさまざまな分野の知識豊富な媛媛さんと一緒に、餡餅他の料理を作ったり頂いたりしながらお話ししましょう。

当日メニュー：<sup>ジャールピン</sup>餡餅、<sup>ピータン</sup>什錦粉条冷拌、<sup>クワンジャオ</sup>皮蛋拌豆腐、<sup>ダントアン</sup>芝麻醬拌胡瓜、<sup>タンドアン</sup>玉蜀黍の粉で作ったお粥  
元宵（デザート）\*中国春節15日は元宵節といい五穀豊穡を祈ります。その元宵節に頂く節句料理で湯団とも呼ばれます。

2007年4月15日(日) 13:00～17:30

料理と一緒に作る方：13:00に会場にお出で下さい。食べるだけの方：15:30に会場にお出掛け下さい。

於：鶴川市民センター・第二会議室 申込＆問合せ：‘TEL/FAX 042-734-5100’わんりい’  
小田急線鶴川駅バス鶴川支所前下車0分

参加費：2000円 15名～20名(申込制) \*参加は会員と会員関係者のみです

ren shujian  
任書剣ドキュメンタリー映画

「北朝鮮の夏休み」上映会

(2004年制作 75分 監督：任書剣)

「2004年夏、僕は大学の夏休みを利用して北朝鮮に行った。日本では拉致問題や核の開発などで悪い印象を深めている北朝鮮だが、北朝鮮の人々の実際の姿とさまざまな夢に触れたいと思った…」任書剣(関連記事P15)

2007年4月19日(木) 19:00～20:15

於：まちだ中央公民館・視聴覚室

JR横浜線町田駅ルミネ口下車徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

参加：無料 先着：36名(申込者優先)

主催：日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
申込み＆問合せ：TEL/FAX 042-734-5100‘わんりい’  
E-mail wanli@m2.ocv.ne.jp



任書剣 プロフィール

1975年▶出生 1998年▶中国南京大学卒業 1998年▶来日  
1998年～2000年▶奈良日本語学校 2000年4月▶日本映画学校入学 2001年▶ドキュメンタリー映画「かれらの家」企画・監督 2002年▶ドキュメンタリー映画「蒲公英的歲月」企画・監督/日本映画学校今村昌平賞受賞 2003年3月▶日本映画学校卒業 2003年4月▶日本大学芸術研究科映像芸術専攻課程進学 2004年▶ドキュメンタリー映画「北朝鮮の夏休み」企画・制作/湯川賞受賞 2007年3月▶日本大学芸術学研科映像芸術専攻後期博士課程修了

\*日本不法滞在の兄弟たちの生活を追った「<sup>たんぽぽ</sup>蒲公英的歲月」は高い評価を受け、選ばれて山形国際ドキュメンタリー映画祭2003及びあきた十字映画祭2003に出品。「北朝鮮の夏休み」もあきた十字映画祭に出品されている。

4月定例会 4月15日(日)何媛媛さんの交流会後  
於：鶴川市民センター第二会議室 18:30(予定)～  
4月号おたより発送日 4月27日(金)田井宅13:30～  
\*どなたでもご参加ください。

第3回日本中墨会水墨画展 【入場無料】

‘わんりい’にお馴染みの中国人画家・<sup>manbai</sup>満柏さん指導の  
水墨画教室連合の展覧会

於：相模原市民ギャラリー (TEL: 042-776-1262)

(JR横浜線・相模原駅ビル4F)

時間：2007年5月10日(木)～14日(火)

10:00～17:00(初日13:30より 最終日15:00まで)

問合せ：事務局 〒229-1123 相模原市上溝1252-15

電話：042-757-9518

e-mail: manboinsea@yahoo.co.jp

“あさおサークル祭り2007”で会いましょう！

2007年5月19日(土)/5月20日(日)

あさおサークル祭では麻生市民館を利用して活動しているそれぞれのサークルが、日頃の活動を発表します。‘わんりい’も毎年、趣向を凝らした催しを企画し参加しています。

【視聴覚室】

●5月19日(土) 10:30～11:30

「天空の花園・四姑娘山の花々」(スライド)

解説：河本義宣(‘わんりい’会員)

●5月20日(日) 10:30～12:00

「幸せなら手を叩こう」(如果感到幸福你就拍拍手)

を中国語で歌ってみよう！！

指導：趙鳳英さん

中国人歌手/‘わんりい’「中国語で歌おう！会」講師

【大会議室】

●5月20日(日) 14:30～16:00

「TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブル」演奏

\*参加無料

昨夏、内モンゴル自治区フフホト市で演奏し、馬頭琴演奏関係者達より高く評価された「TOKYO 万馬馬頭琴アンサンブル」の皆さんが、日頃の練習の成果を披露くださいます。